

氏名	おか たつや 岡 達也
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第703号
学位授与の日付	平成26年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学位論文題目	近代京都の伝統産業における図案教育の波及に関する研究 —京都高等工芸学校卒業生を中心として
審査委員	(主査)教授 中野仁人 教授 並木誠士 教授 山本建太郎

論文内容の要旨

本論文「近代京都の伝統産業における図案教育の波及に関する研究—京都高等工芸学校卒業生を中心として」は、第1章から第5章により構成されている。

「はじめに」で本論文の目的を述べ、京都高等工芸学校図案科の図案教育に関して、具体的な事例の検討をデザイン分析という手法で進める本論文独自の研究方法を明らかにしている。

「第1章 近代京都の工芸における図案と図案教育」では、近代京都の図案を取り巻く背景を概観するとともに、本論における図案と図案教育について定義し、同時に論文の構成を「導入」「展開」「実践」の3点から示している。

「第2章 図案の導入—明治京都の教育機関における図案教育」では、京都高等工芸学校図案科の初期生徒作品に見られるモチーフ、色彩、レイアウトなどをグラフィックデザインの側面から分析をおこなうことで、図案教育における海外の様式の導入について検討し、その傾向と特徴について明らかにした。こういった分析手法は従来なされてこなかった方法であり、評価に値するものである。

「第3章 図案の展開：出版活動からのアプローチ」では、図案科卒業生が出版した図案集を手がかりにして、教育現場だけでなく広く一般に向けて図案の啓蒙および普及が試みられた点について考察を加えている。特に京都高等工芸学校の卒業生、水木兵太郎の『アブストラクトパターン』(1930(昭和5)年)と向井寛三郎『図案への通路』(1930(昭和5)年)を掘り起こし、彼らが同時代の海外のデザインを紹介するとともに自らの図案へ取り込みながら、思考を理論化する過程を検証し、図案教育の展開として位置づけている。

「第4章 図案の実践：制作現場からのアプローチ」では、京都高等工芸学校の卒業生が関係した企業における活動事例をもとに、生産体系での図案の実践について検討し、学理の追究としておこなわれていた図案教育の産業界への影響を明らかにしている。

これらの検証をもとに「第5章 結論」では、京都の伝統工芸産業における図案教育の波及についてまとめている。すなわち、図案は装飾としての機能から発展し、考案者の意図を正確に伝えるための手段として教育されたものであったが、実際の生産現場においては、生産体系の連携を果たす役割として、図案制作の技術はもとより、図案を構築するための体系的な思考そのもの

をもって実践されていたとして結論づけている。

以上、本論文は、本学美術工芸資料館が所蔵する実物資料をもとに綿密な調査分析を積み重ねることにより、京都高等工芸学校の図案教育の特質を明らかにした論文であり、その成果が今日のデザイン教育をめぐる研究に寄与することは明らかである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、京都工芸繊維大学の前身である京都高等工芸学校図案科における図案教育の成果と、図案教育を受けた生徒が卒業後に社会の図案制作の現場で果たした役割について、当時の生徒作品と卒業生の出版物や関係した企業における活動などの事例から検討し、それにより、京都高等工芸学校図案科で教育として導入された図案をどのように発展させ、社会へと波及させていったのかを明らかにしようとしたものである。

これまで、近代日本デザイン史において、京都高等工芸学校図案科の図案教育の重要性が指摘されてきたが、本論文では、先行研究に見ることができる史学的な側面からの要素をベースにして、具体的な事例の検討にデザイン分析の手法を取り入れることで、実際の成果物としての図案における特徴の検討に成功している。とくに本学の美術工芸資料館が所蔵する現物資料をもとに調査している点は、本学の教育と研究の変遷を顧みる意味でも貴重な研究である。

本論文が独自の価値を有する第一の点は、近代京都の図案を取り巻く背景を概観した上で、図案と図案教育について定義し、同時に図案の「導入」「展開」「実践」という3つの流れで構成して進めている点である。それはすなわち、京都高等工芸学校が西洋の図案表現をどのように導入して、当時の生徒たちに教授し、独自の図案作成法として展開出来たか、そして社会における産業としてどのように実践し得たかという、本来の図案教育の果たすべき役割を問う研究である。

また、独自性の第二点は、京都高等工芸学校図案科の初期生徒作品および卒業生の制作した図案をモチーフ、色彩、レイアウトなどを細かく数値化した上で、グラフィックデザインの側面から分析することでその傾向と特徴について明らかにした点である。それは、当申請者自身がデザインを実践しているという立場からの調査分析であり、これまでの史論的な観点からは成し得なかった研究である。

上記のように、本論文は基礎的な作業を踏まえて、さらに独自の視点からの考察を展開したものであるとして、十分評価に足るものである。

なお、本論文の一部は、いずれも申請者の単著である査読付の2論文(①②)として、すでに公表されている。

①岡達也：「京都高等工芸学校生徒作品における西欧デザインの受容」意匠学会『デザイン理論』第60号、5頁-18頁(2012年)

②岡達也：「水木兵太郎『アブストラクトパターン』に見る図案の特徴」日本デザイン学会『デザイン学研究』vol 60、no.6(印刷中)(2014年)